

ジョージ・ハーバートとヘシオドス

——働き蜂と怠け蜂——

山根 正弘

はじめに

17世紀イギリスの宗教詩人ジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) は「仕事(1)」 (“Employment [1]”)と題する詩で、天職を知らず行き場を失った不安を表現するのに、蜜蜂のイメージを用いる。自然界や日常生活のささいな事物をイメージとして用いることを得意とした詩人に格好の題材である。

All things are busie; onley I
Neither bring hony with the bees,
Nor flowres to make that, nor the husbandrie
To water these. (ll. 17-20)¹⁾

(すべてのものは働き者、ただ私だけが
蜜蜂と蜜を集めることもせず、
蜂蜜を生む花を植えることもなく、それらの花に
水をやる農作業もしない。)

万象の鎖という秩序の中で下に降った小さな生き物、蜜蜂でさえ仕事がある。それよりも上位の人間ハーバートにはそれに相応しい仕事があるはずだ、という。「賛美(1)」 (“Praise [1]”)と題する詩では、人としての責務が神の賛美であると確信する。

O raise me then! Poor bees, that work all day,
Sting my delay,
Who have a work, as well as they,
And much, much more. (ll. 17-20)

(それでは私を引き上げて下さい、終日働く小さき蜜蜂が
私の停滞を針で刺激せんことを。
私には蜜蜂と同様仕事があるが、
それは遙かに立派なもの。)

森羅万象すべてが神を讃える役割があり、ハーバートも賛美の歌を数々作成してはじめて、神の許へ帰ることができる。その喜びは、「星」(“The Starre”)で、巣箱に勇んで戻る蜜蜂と二重写しとなる。

To flie home like a laden bee
Unto that hive of beams
And garland-streams. (ll. 30-32)

(荷を積み込んだ蜜蜂のように
御光と幾重もの花冠
の巣箱へと飛び帰る。)

今日の英語でも “as busy as a bee” といえ、いつもせわしく働く姿が想起される。蜜蜂(ミツバチ)は働き者の象徴である²⁾。この点は万人が認めることであり、古代ギリシャやローマの権威を引き合いに出す必要もなからう。だが、ちなみにアリストテレスは『動物誌』で、「有節動物の中で、否その他のほとんどすべての動物と比べてみても、最も勤勉なのはアリの類とミツバチの類で・・・」といい、さらに「ミツバチは働かぬ者や儉約しないものを追い出す」という³⁾。プリニウスも『博物誌』で、「蜜蜂は仕事に出かけ、天気が許すならたった1日たりとも無駄にすることはない」といい、怠け者については「蜜蜂は目下進行中の仕事をきびしく監視し、動作が緩

慢な蜂の怠慢に目を留め、後に死刑に処することもある」と、記す⁴⁾。

また、アリストテレスは様々な生き物をその生活習慣や行動パターンにより分類を試みる。群をなす、なさないという点から分けた場合、社会的にまとまったものとバラバラのものがあるとし、前者すなわち社会的動物にはその構成員すべてに仕事(役割分担)があるとする。この代表例に、人間や蜜蜂それに蟻などを挙げる。さらに、社会的動物を細かく見ると、リーダーの支配下にあるものとそうでないものがあり、蜜蜂にはリーダー(指導者・主権者)がいるが、蟻にはいないと分析する⁵⁾。蜜蜂には支配者がいて統率された社会を形成し全員に仕事があるという観点からすると、蜜蜂のイメージで表現されるハーバートの苦惱は社会を動かす菌車になれないことに起因する、つまり存在意義を見失った苦惱であるといえる。この詩に援用された蜜蜂のイメージは、アリストテレスが基となっているのであろうか。それとも、敬虔な詩人に相応しく聖書の一節が基となっているのであろうか。17世紀後半のイギリスでは、古代と近代との優劣について論争が盛んに行なわれ、その社会現象を風刺したジョナサン・スウィフトの『書物戦争』に蜘蛛と蜜蜂の寓話があるが、前者は近代を後者は古代を象徴している⁶⁾。古来より人間の生活に密着し人間社会の模範を示唆する、この蜜蜂のイメージ形成の由来を解明するのが本稿の目的である。

I 昆虫の劇場

蜜蜂のリーダーは、現代では女王蜂と認知されているが、古代ギリシャでは雌雄の別が曖昧であった。そもそも蜜蜂の生殖や発生自体が定かではなかった。ある説では、幼蜂を草木から運んでくるのであり、また死肉から自ずと湧き出るといのである。というのも交尾行動が人目の付かぬ空中で行なわれ、生殖が謎のままだった。それゆえ人間は道徳観念を持ち込み、衆人環視のもと交尾をする他の生き物と違い、蜜蜂はまこと慎み深いと考えていた。自然の事物を鋭く観察したアリストテレスでさえ、リーダーの性別を特定せず、自然科学者の諸説を羅列する⁷⁾。養蜂家で気付いていた者もあろうが、広く社会に承認されず、「女王蜂」の存在は故意に隠

蔽された可能性がある。時代が下って王政時代のイギリスでは、蜂窩または巣箱を統べるリーダーが雄の王蜂と考える方が、人間世界との類推から、また家父長制の維持・強化から、都合が良かったと推察される。

エリザベス朝の劇作家シェイクスピアは蜂の性別には無関心であったが、『ヘンリー一五世』(1599年頃)で人間社会の縮図として蜜蜂の世界を描く。

... the honey-bees,
Creatures that by a rule in nature teach
The act of order to a peopled kingdom,
They have a king and officers of sorts;
Where some, like magistrates, correct at home,
Others, like merchants, venture trade abroad,
Others, like soldiers, armed in their stings,
Make boot upon the summer's velvet buds;
Which pillage they with merry march bring home
To the tent-royal of their emperor. . . (Henry V, I. ii. 187-96)⁸⁾

(蜜蜂、それは自然の法によって人間界の秩序ある行動を教える生き物で、彼らには王や各種の役人がいる。ある者は行政官よろしく本国で不正を匡し、ある者は商人よろしく海外と貿易をなし、またある者は軍人よろしく刺針で武装し、ヴェルヴェットのような夏の花蕾に襲いかかり、分捕った品を陽気に行進しながら、王の天幕に持ち帰る・・・)

この台詞は女王エリザベス一世の御代に書かれたが、1603年の崩御が間近に迫っていた。

1634年に『昆虫たちの、あるいは、微少な動物たちの劇場』(*Insectum sive minimorum animalium theatrum*) がトマス・マフエット (Thomas Moffet / Muffet, 1533-1604) の名を冠して出版される。この昆虫誌が出版される経緯はすこし複雑である。もとは、著名な博物学者ゲスナー (Konrad Gesner, 1516-1565) によって着手

され、遺された仕事をその友人トマス・ペニー (Thomas Penny, d. 1588) が受け継ぎ、その遺稿をマフェットが整理した模様だが、完成はしなかった。マフェットの手に渡ったのは、おそらく彼が1599年に『蚕の幼虫と蛾』(*The Silkwormes and their Flies*) を公にしていたからであろう⁹⁾。英国における桑の植林と養蚕の促進を目的とし、ウェルギリウス (Vergil, 70-19 B.C.) の農耕詩を真似た教化詩だが、マフェットは昆虫の生態を描くのが本業ではなく、昆虫誌のまとめ役として適任とは言えなかった。マフェットの没後30年、ようやく後援者 (Theodore Mayerne など) の尽力・編集により日の目を見ることとなった。当時の昆虫学の集大成ともいえるこの書はラテン語で書かれていたためか、1658年にジョン・ローランド (John Rowland) による英訳『昆虫の劇場』(*The Theater of Insects*) が、エドワード・トプセル (Edward Topsell) の『動物誌』(*The History of Four-Footed Beasts*) と『爬虫類・両棲類誌』(*The History of Serpents*) と併せて1巻本の形で出版される。英語版『昆虫の劇場』で、蜜蜂の性別について次のように描写される。

The prince of Philosophers confounds the sex of Bees: but most writers distinguish it: some say females are the greater, and without stings: others say they are lesse and have stings. The sounder Philosophers (whose opinion I follow) acknowledge no males but their chief leaders, which are more strong, greater, more able, and alwaies stay at home for propagation, and seldome go forth but the whole swarm; whom nature hath commanded to be frequent in Venus occasions, and ordained them to stay alwaies at home with their females. (Book I, Chapter I)¹⁰⁾

(哲学の第一人者 [アリストテレス] は蜜蜂の性別が曖昧だ。けれど、たいいてい
の作家は区別している。雌の方が大きく針がないという者もいれば、その逆
だという者もいる。信頼するに足る哲学者たち、その者たちの考えに私は従う
が、彼らは主たるリーダー以外に雄は認めない。そのリーダーは、強く、大きく、
有能で、常に繁殖のために巣に籠もり、群全体と連れ立つ以外はめったに巣を離
れず、しかも生まれつき交尾に及ぶことしばしばであり、常に雌と時を過ごす、

という。)

1世紀以上にわたり複数の専門家が係わった書物であるが、イギリスでは王政復古直前にもかかわらず、蜜蜂の群のリーダーは雄で、女王蜂という語は現れない。

1649年イギリスでは国王チャールズが処刑され、時代は共和制へと移行する。弑逆に憤慨した大陸の王党派は、フランスの学者サルマシウス (Salmasius) に『チャールズ1世弁護論』を書かせる。護国卿クロムウェルのもとラテン語の秘書官を務めていた詩人ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674) が、英国民ために弁護を引き受ける。国王はいかなる法をも超越し、その王を断罪することはできないとする論敵サルマシウスに対し、ミルトンは彼の言は歴史的にも虚偽であり、彼自身もかつてはその様に解釈していたが、賄賂に目が眩んでかその論を翻すという。つまり、サルマシウスはその著『教皇首位権反駁論』で、トレント公会議の席上、教皇の首位権を立証するのに蜂を範例として用いた神学者に対し、博物学の知見から次のように反論していた。

「蜂の統治形態は共和制であり、博物学者もそう言っている。王はいるが害を及ぼさない。それは専制君主というよりもむしろ指導者といえよう。臣下の蜂を突いたりこづきまわしたり、殺したりすることはない。」(新井・野呂訳『イングランド国民のための第1弁護論』第2章)¹¹⁾

「蜂の範例」とは、ウェルギリウスの『農耕詩』(The Georgics) 第4巻で描かれる蜜蜂のことであろう。「エジプト人も、強大なりュディアの人も、パルティアの民も、ヒュダスベス河畔のメディア人も、蜜蜂ほどに王を敬うことはなく、王が安泰であるかぎり、みな心がひとつにし、崇敬の的となる」という一節だ¹²⁾。ミルトンはサルマシウス自身の言葉を、いわば逆ねじを食わせる形で彼に投げ返し、悪業を為す国王処刑の正当性を主張し、さらにサルマシウスを「刺針をもたぬ雄蜂^{なまくらもの}」と断罪するとともに、「トレントの蜂」(第5章)と揶揄する。サルマシウスの言葉からは女王蜂ではなく王蜂の存在が窺われる。

イギリスでは18世紀になっても、寓話のなかのことだが、ミルトンが引用したサルマシウスの蜂の世界が存在する。キリスト教で説く従来的美徳、禁欲や節制に重きを置かず、奢侈を肯定してこそ経済は発展する、と当時としては大胆なパラドックスを示したバーナード・マンデヴィル (Bernard Mandeville, 1670-1733) の「ブンブなる蜂の巣、悪者が正直者になる話」(“The Grumbling Hive, or Knaves turn’d Honest,” 1705) でも王蜂である。「彼らは暴政の奴隷でもなく / 気ままな民主政治に支配されているわけでもなく / 王によって統治されていた。その王の権力は、 / 法により制限されていたが故に、王は悪事をなすことができなかった。」(泉谷治訳『蜂の寓話』所収)¹³⁾ イギリスでこの問題、蜜蜂のリーダーが雄か雌か、に決着が付くのは18世紀半ばである。歴史学者キース・トマスによると、女王蜂の存在を証明したのは、オランダの昆虫学者スヴァンメルダム (Swammerdam, d. 1685) で、彼の著書は1740年まで出版されず、しかもオランダ語とラテン語版だけだったという¹⁴⁾。

古代ギリシャ以来、リーダーとなる蜂の性別の他、もうひとつ明確でないのは、怠け蜂「ドローン」(drone) である。現代では蜜蜂の雄、つまり雄蜂のことであるが、蜜蜂の1種とも、別種の蜂とも考えられていた節がある。この蜂は、一見したところ、蜂窩に寄寓し働き蜂が採取・貯蔵する蜜を食べるだけが能である。古代ローマのアイリアノスの『動物の特性について』によると、蜜蜂が寝静まったのを見計らって蜂蜜を略取する。見張りの蜂に見つかり、軽い罰を受け巣から追い出される。しかし、ドローンはこれを教訓とせず、というのも生米、怠惰で貪欲なものだから、巣外で身を潜め働き蜂が牧場に出かけると、その隙にたらふく蜜を平らげ身動きがとれなくなり、労働から戻った蜜蜂に露見。今度はひどい仕打ちを受け命を奪われる、という¹⁵⁾。先に触れた、すべての者には仕事があるという社会的動物の規定に抵触するがゆえに分類が曖昧だったのかも知れない。そもそも生殖や発生がつまびらかではなく、巣や巣箱のリーダーが雄か雌か曖昧な時代であれば、女王蜂に受精させる雄蜂の存在は不確かであろう。だが、このいわゆる怠け蜂は、アリストテレスによると(さすがに自説を裏書きするかのよう)、¹⁶⁾「少しいる方が巣箱のためにはよい。

ミツバチがよく働くようになるからである」と、ある意味で触媒の役割を果たすがゆえに存在意義は認められている¹⁶⁾。

『昆虫の劇場』では、従来の説、つまり外で蜜を採取する働き蜂は雄、巣内で怠惰を貪り刺針のない怠け蜂は雌である、を否定し「怠け蜂が雌であるとはとうてい考えられない」(“I scarce think they [Drones] are females” [Book I, Chapter 7])と控えめに新説を唱える¹⁷⁾。だが、働き蜂が通常は子を産まない不完全な雌、あるいは中性とまでは観察が及んでいない。詩人シェイクスピアでは、怠け蜂は性別を超え行動・振る舞いが析出され比喩表現となる。「他者の労苦に結晶を喰らう怠け者のようにはせず、「これらの怠け者、蜜蜂から蜜をかすめ取る。」(“Not to eat honey like a drone / From others' labour;” “these drones, that rob the bee of her honey.” [Pericles, II. Prologue, 18-19; and II. i. 52])そして「大食らいで、儲けには蝸牛のように鈍く、日中は山猫も顔負けに寝る。穀潰しを家に置くものか。」(“a huge feeder; / Snail-slow in profit, and he sleeps by day / More than the wild cat: drones hive not with me.” [Merchant of Venice, II. v. 45-48])

II 労働と怠惰

生業に勤しむの反対は、怠惰に過ごすである。ハーバートの仕事や労働に対する考え方は、怠惰を憎む態度にはっきりと現れる。怠惰はキリスト教では七大罪のひとつであり、教区牧師を勤めていたハーバートが許すはずがない。ルターも、赦してはならぬふたつの罪として、怠惰と貪欲を挙げる。というのも、教会の内部からその統一を破壊する罪だからと強く非難する¹⁸⁾。ハーバートの散文の作品『田舎牧師』(The Country Parson, 1652)の第32章「牧師の俯瞰」(“The Parson's Surveys”)で、無為に過ごす人々の行為が具体的に示され、怠惰が活写される。

The Countrey Parson hath not onely taken a particular Survey of the faults of his own Parish, but a generall also of the diseases of the time, that so, when his occasions carry him abroad, or bring strangers to him, he may be the better

armed to encounter them. The great and nationall sin of this Land he esteems to be Idlenesse; great in it selfe, and great in Consequence: For when men have nothing to do, then they fall to drink, to steal, to whore, to scoffe, to revile, to all sorts of gamings. Come, say they, we have nothing to do, lets go to the Tavern, or to the stews, or what not. Wherefore the Parson strongly opposeth this sin, whersoever he goes. (*Works*, p. 274)

(田舎牧師は教区内の罪を個別に見渡すだけではなく、時代の病弊を全体的に見渡すべきである。そうすれば、何かの機会に教区外に出たり、見知らぬ人が訪ねてきたとき、病弊に遭遇しても一層慎重に身構えることができる。牧師はこの国全体に蔓延する大罪が怠惰であると認定すべきだ。怠惰はそれ自体大罪で、及ぶす影響力も大きい。人は何もすることがなければ、酒を飲んだり、盗みを働いたり、女を買いに行ったり、嘲笑したり、悪口雑言したり、あるいはまたあらゆる種類の賭事に走るようになる。さあ、何もすることがないのだから、居酒屋や売春宿などに行こう、と彼らは言う。それゆえ、教区牧師はどこに行こうとも、この罪に強く反対しなければならない。)

『田舎牧師』が実地の経験に基づく作品であることを考えれば、教区内を家庭訪問するとき目にした光景を潤色したのであろうか。ここに挙げられた悪行の数々は、まさに衝動的な快楽であり、禁欲・節制の敵である。またこれらの状況は、カルヴァン主義のジュネーヴで教会当局が各家庭を訪問し、怠けてないか、酩酊してないか、よからぬ悪事に身を染めていないか監視していたのと、相通じるものがある¹⁹⁾。なお、プラトンはアテナイのような寡頭政治の弊害を述べる際、殖財の道をひたすら進み、金にのみ執着する支配者を浪費家と断罪し、「怠け蜂」にたとえる。“as the drone springs up in the cell, a pest of the hive, so such a man grows up in his home, pest of the state?”「まるで蜂の巣穴のひとつに怠け蜂が発生し巣箱の疫病となるように、そのような人間が家庭に育ち国の病となる。」(『国家』第8巻)²⁰⁾ 腐った林檎が箱にひとつあるとすべてに伝染する如く、個々人の怠惰が国全体に蔓延するとは、ハーバートも同じ考え方だ。

また、ハーバートによると、田舎牧師は病弊の原因を究明するだけでは事足りず、教区民に説諭して怠惰をなくすため尽力しなければならぬという。

And because Idleness is twofold, the one in having no calling, the other in walking carelessly in our calling, he first represents to every body the necessity of a vocation. The reason of this assertion is taken from the nature of man, wherein God hath placed two great Instruments, Reason in the soul, and a hand in the Body, as engagements of working: So that even in Paradise man had a calling, and how much more out of Paradise, when the evils which he is now subject unto, may be prevented, or diverted by reasonable employment. Besides, every gift or ability is a talent to be accounted for, and to be improved to our Masters Advantage. Yet is it also a debt to our Country to have a Calling, and it concerns the Common-wealth, that none should be idle, but all busied. (*Works*, p. 274)

(そして怠惰には二種類ある、ひとつは仕事がないこと、もうひとつはいい加減に仕事をすることであり、牧師はまず仕事の必要性を皆に説く。この主張の拠り所は人間の本質から導き出される。つまり、神は人間にふたつの素晴らしい道具、魂には理性を、身体には手を与えた。それによって我ら人間は労働に従事できるようになった。楽園においてでさえ、人には仕事があった。まして楽園の外では、今陥っている悪事が仕事によって妨げられ回避でき、なおさらである。その上、天稟つまり天賦の才は、我が主に収支報告をし、主のために増殖すべきもの [タレント] である。さらに、仕事に就くのもまた国民の義務であり、だれひとりとして怠惰ではなく働き者であることが国家にとっても重要である。)

「創世記」によると、人類の始祖アダムがエデンの園に置かれたとき、そこは食べ物を差し出すあらゆる木々が地に繁茂していたが、それでも主なる神は庭の手入れや樹木の剪定をするよう命じられたという (2章15節²¹⁾)。楽園追放のあと、額に汗し

て天与の仕事に打ち込めば、怠惰にならず悪事に手を染めることがない、つまり、禁欲・節制の手段となる。まさにプロテスタントに典型的な考え方だ。なお、「マタイ福音書」25章14-30節「タラントンのたとえ」によると、ある主人が遠出をする際、下僕にそれぞれの能力に応じて1タラントン、2タラントン、5タラントンを預け、戻ってきたとき収支報告をさせる。1タラントンの者だけが利殖を得られず、主人の不興を買う。タラントンは古代ギリシャ・ヘブルの通貨単位で、英語のタレント (talent) はこの語に由来する。天与の才能・能力は、後生大事に保管しておくのではなく、勤労によって利潤を得るべきだという話で、お金儲けを正当化する文脈、カルヴィニストに引用される。ハーバートもその家系は、イギリス・プロテスタントの旗頭ペンブルック伯爵家と縁戚関係にある。長兄のエドワード・ハーバートはその推挙で駐仏特命大使を務め、後に男爵の位に叙せられる。ジョージ・ハーバートはケンブリッジ大学の要職で政界に進む足掛かりとなるはずの大学代表弁士となるが、夢破れて結局は、ペンブルック伯爵の^{つて}伝でそのお膝元ウィルトン・ハウス近くベマトンの教区牧師の僧職を得る²²⁾。ペンブルック伯爵の派閥の中には、ヴァージニアなど植民地事業に加担する投機的な冒険商人もいた。ハーバートはこれらの派閥の雰囲気を感じ、意図的に文中にその思想の一端を盛り込んだと思われる。

ところで、長老派の牧師リチャード・バクスター (Richard Baxter, 1615-1691) は、実践的な問答集『キリスト教徒の指針』(A Christian Directory, 1673)で、個人の救いのため世事を捨て去ることの是非を問い、次のように戒めている。

Every one that is a member of church or commonwealth, must employ their parts to the utmost for the good of the church and commonwealth: public service is God's greatest service. . . And God hath commanded you some way or other to labour for your daily bread, and not live as drones on the sweat of others only. Innocent Adam was put into the garden of Eden to dress it; and fallen man must "eat his bread in the sweat of his brow," Gen. iii. 19; and he that "will not work must be forbidden to eat." 2 Thess. iii. 6, 10, 12.²³⁾

(教会や国家の一員である者すべては教会と国家の福祉のために、できうる限

り自分の才能を発揮しなければなりません。人々のために尽くすことが神への最大の奉仕になります。[中略]そして神は日々のパンを手にするために何らかの方法で働き、怠け蜂のように他者が汗水流して得たものを食らないように命じています。罪のないアダムは手入れをするためにエデンの園に置かれ、墮落後は額に汗してパンを食べなければなりません。[「創世記」3章19節]そして働かない者は食べてはなりません。[「テサロニケ信徒への手紙」{2}3章6・10・12節]

浮浪者や生活の扶助を受けている者だけではなく、たとえ働かなくとも生きていける富裕層、貴族やジェントリー階級であっても独り瞑想に耽り祈るのではなく、社会の中で仕事に励み日々の糧を得ることが人の生きる道だという。やはり、怠惰は労働の敵であり、説教壇からも激しく非難され、「怠け蜂」がその象徴として用いられる。ミルトンにとっても、仕事こそ人間の^{メルクマール}の徴表である。「神は、昼と夜と同じく、労働と / 休息とを交互に人間に課しておられる(中略) / 他の生き物には別に仕事もなく(中略) / しかし人間には、 / 日々定められた心と体の仕事というものがある。それが人間の / 尊厳を示しており・・・」(平井正穂訳『失樂園』第4巻)²⁴⁾

怠惰の象徴となる雄の怠け蜂は、『失樂園』で天地創造の第6日目、無数の生き物が生み出される際、蟻のあと姿を現す。

Swarming next appeared

The female bee that feeds her husband drone

Deliciously, and builds her waxen cells

With honey stored. (*Paradise Lost*, VII, 489-492)²⁵⁾

(つぎに、群をなして / 雌蜂が現れ、美味豊かな食物を供して / その良人である雄蜂を養うとともに、蜜を入れる / 蜜蠟^{こしら}を拵えていた。[第7巻、34頁])

『失樂園』が出版されたのは、王立協会設立後の1667年である。『昆虫の劇場』と同様、女王蜂の存在は確認できないものの、雌の働き蜂と雄の怠け蜂との関係は明確に理

解されている。

さらに、ハーバートは長子相続制のもと親の跡目を継げない二男・三男（ハーバート自身もジェントリー階級の五男であった）の無為な生活もやり玉に挙げる。

As for younger Brothers, those whom the Parson finds loose, and not ingaged into some Profession by their Parents, whose neglect in this point is intolerable, and a shamefull wrong both to the Common-wealth, and their own House: To them, after he hath shew'd the unlawfulness of spending the day in dressing, Complementing, visiting and sporting. . . (Works, p. 277)

（嫡子でない子弟については、彼らを牧師は自由気ままであると考え、それも親は彼らを職に就けず、その親の怠慢たるや、この点においては許容できないばかりか、一族や国家に対して恥ずべき悪業となっている。彼らに、衣装に凝り、お世辞を言い、訪問し、遊んで時を浪費することが非合法であることを示したあと・・・）

上流階級の子弟で伊達男がする「衣裳に凝りお世辞を言う」は、よほど目障りだったのか揶揄の対象となり、酔生夢死の生活態度を嫌うハーバートの心性が現れる²⁶⁾。ハーバートはこれらの輩に、商工業の基本となる民法と、頭脳の鍛錬のため数学とを教え、そのあと築城術と航海術を習得させるよう奨める。それでも彼らが興味を示さないなら、「新大陸の植民地以外に働けるところはない」(“where can he busie himself better, then in those new Plantations, and discoveries. . .?” [Works, p. 278]) と、「牧師の俯瞰」の章を結ぶ²⁷⁾。

ところで、ハーバートの親友にハンティンドン州リトル・ギディングの地に宗教共同体を拓いたニコラス・フェラー (Nicholas Ferrar, 1592-1637) がいる。ハーバートと同じケンブリッジ大学出身で、父親の跡を継ぎ商人となったが、投資していたヴァージニア・カンパニーが突然、1624年に認可を取り消された。ヴァージニアが国王の直轄植民地になったからだ。それを機に（あるいは恨みに思い）、一族の者と自足自給の瞑想生活に入る。フェラーの従弟でやはりハーバートの親友となったアー

サー・ウッドノス (Arthur Woodnoth, c. 1590- c. 1650) はロンドンのフォスターレーンで金細工商あるいは金融業に携わっていたが、身近なふたり、一方は宗教共同体のリーダーを務め、もう一方は田舎の教区牧師を勤めるのに刺激されてか、聖職に就く決意を表明する。ウッドノスは自分の生業について、如何にしてキリスト教徒は良心の呵責なく商工業に勤しむことができるのか、という疑問をもとより抱いていたらしい。あるいは、金融業に従事していたのであれば、「利子所得の罪悪」にさいなまれていたかもしれない。フェラーは、中世以来の原則、公平・公正な価格設定を語気を強めて主張し、徒弟に転職するなど繰り返すばかりであった²⁸⁾。1631年10月のこと、ウッドノスはハーバートの継父でヴァージニア・カンパニーに携わっていたジョン・ダンヴァーズのアシスタントを務めていたが、従兄フェラーの助言には飽きたらず、ハーバートにも転職の相談をする。同年10月13日付のウッドノスからフェラーに宛てた手紙によると、どうやら出世できる望みが薄く勤め口を変え聖職者になりたいという。ハーバートは即答を避け、翌日、文書にしたため読み上げたという。7項目にわたって反対理由を示すものの、例えば使徒パウロの掟「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい」(「コリント信徒への手紙」[1] 7章20節)を援用し、芽が出ないと言うなら種を蒔いたことは確か収穫を待ちなさいと説得するが承伏しがたい。それでさらに翌日、ハーバートは付則をひとつ補い職業倫理を表したという。

For any scruple of leaving the trade, throw it away. when we exhort people to continue in their vocation, it is in opposition to idleness. work rather than do nothing. but to chuse a higher work, as God gives me higher thoughts, & to rise with his favours, can not but be not only allowable but commendable. The case of ministers & magistrates is another thing, & the one are Gods servants, the other the common-wealth, & therefore not relinquishable without their masters consent. but a Trade having two things the one employment, the other profit. the work I may change, the profit, I am master of. ²⁹⁾

(生業を辞めるのにほんの少しでも^{ためら}躊躇いがあるなら、その考えを捨て去りなさい)

い。人に現在の職業を続けるように勧めるのは、それが怠惰の対極に立つものですから。無為に過ごすよりは働きなさい。しかし、神が私にさらに崇高な考えをお与えになる如く、さらに高尚な仕事を選びそして神の恩寵を得て出世することは、許容されるばかりか称賛されるべきことであります。聖職者と政治に携わる者の場合は商工業とは別で、前者は神の遣いで、後者は国家の使いであり、したがって、主や主君の同意なしに辞めることはできません。しかし商工業にはふたつの面、仕事と利益、自分で変えられる仕事と意のままにできる利益があります。)

ウッドノスは説得され、ダンヴァーズのもとに留どまり植民地事業の草分けとして名を残すことになった。

ハーバートは詩人で、散文の形で長広舌を揮った勤労と怠惰の対置を詩の形で縮約して提示する。『聖堂』(The Temple, 1633)に納められた「教会の袖廊」(“The Church-Porch”)で、無為な生活を避け怠惰に身を任せるな、と教訓を垂れる。

Flie idleness, which yet thou canst not flie

By dressing, mistressing, and complement. (ll. 79-80)

(怠惰を吹き飛ばせ、けれども、それは、衣装に凝り、

恋人と戯れ、お世辞を言うことで果たせるものではない。)

この怠惰は、プラトンの『国家』で指摘されたように、実はイギリス全土に蔓延しているという。続けて、「ああ、英国よ、罪にまみれた国、なかでも怠惰に」(“O England! full of sinne, but most of sloth.” l. 91)と断罪する。

これまで見てきたことから、ハーバートが用いる蜜蜂のイメージはプロテスタントが推奨する勤労の象徴で、怠惰を戒めるものであった。だが、説教壇で攻撃され標語として援用される「雄の怠け蜂」は、彼の著作に現れることはない。

Ⅲ ヘシオドスと怠け蜂

アリストテレスよりも前の時代に蜜蜂の勤勉さを描いた詩人は、紀元前700年ごろのヘシオドス (Hesiod) である。ホメロスはヘシオドスの先輩叙事詩人で、たしかに蜜蜂のイメージを用いるが、それは会議の場へ繰り出す兵士の軍勢を表している。

その有様は、さながらにぎっしり群れ塊った蜜蜂の群が次から次へと
空洞^{うつつ}の岩より絶えず新規に繰り出してはやって来るよう、
集団をなして春に咲く花々の上を飛び回ってゆき、
此処にいっぱい群れて飛び交うと見れば彼処にも飛び交わす
そのさまにも似て・・・(『イーリアス』呉茂一訳、第2書)³⁰⁾

蜜蜂の自由活発な働きぶりが観察され比喩となっているが、主眼点は勤勉さではない。同様に、ホメロスを下敷きにしながらミルトンは、地獄に墮ちたサタンの呼びかけにより麾下の天使たちが万魔殿 (パンデモニウム) に参集する様を蜜蜂になぞらえるが、やはり焦点は勤勉さではない。

太陽が金牛宮に入る陽春の頃ともなれば、蜜蜂は夥しい
若蜂の群をその巣から外へ追い出すが、それらの群は、
いくつかの塊りとなって爽やかな朝露や花の間を右往左往して
飛びかい、かと思うと、いわば藁^{じょうさい}の城砦ともいえる
巣箱の外郭、つまり馥郁たる蜜液が附着したばかりの
滑らかな板の上に降りたち、行きつ戻りつしながら
国家の大事を協議することがある — まさにその光景を
思わせるのが飛翔する天使の群が翕然^{きゅうぜん}として集まり、
薙^{ひし}めき合っている姿であった。(『失樂園』第1巻、49-50頁)

「詩編」118番12節の聖句「彼らは蜂のように我を包囲し、灰が灰燼に帰すように消

滅する」がミルトンの念頭にあったかも知れない。聖書では、普通、蜜蜂は勤勉の象徴ではなく、敵の襲来や脅威を表す。いずれにしても、ここでは蜜蜂は悪の象徴となっている。

『詩論』で知られる古代ローマのホラティウス (Horace, 65-8 B.C.) は文学研究者・批評家でありながら、抒情詩人でもある。彼によるとギリシャの先輩詩人ピンダロスは白鳥で、彼自身は蜜蜂だという。

ディルケーの白鳥 [ピンダロス] が、雲奔るたかき境に駆けるときは、つよき風がつねにこれを飛翔せしめますもの。(されど)このわたしは、マティヌス(の山)の蜜蜂の、限りもなき杜、水ゆたけきティープルの川岸をめぐり、骨折りて快き香草を摘むにも似たるすがたにて、つつましき詩人として、推敲の詩歌をものしましょう。(藤井昇訳『歌章』第4巻第2節)³¹⁾

古典学者ギルバート・ハイエットの解説によると、ホラティウスは自身、蜜蜂のようだという。勤勉で、地面に近い所を少しの距離だけ飛び、様々に異なった無数の花から甘い蜜を集める。たしかに白鳥の方が強く、人目に立って美しい。だが、蜂は蜜を作る。蜜というものはこの世で独特のもので、無数の花の香りを秘め、食物であるだけでなく不死の象徴でもある、という³²⁾。

蜜蜂が蜜を漁る情景は古今東西普遍的なものであるが、それを目にする者の感覚次第で様々なイメージが形成される。上記以外では例えば、モンテーニュ (Montaigne, 1533-1592) の『エッセー』(Essays) の一節が挙げられる。「蜜蜂はあっちこちと花をあさって、その後でこれから蜜を作ります。この蜜は全部彼らのものです。もはやたちじゃこう草でもマヨナラ草でもありません。」(原二郎訳、第1巻第26章「子供の教育について」)³³⁾ モンテーニュがここで言いたいのは、古の権威ある言葉を鵜呑みにするのではなく、十分咀嚼して自分のものにすべきだ、ということである。ちなみに、アリストテレスは蟻と蜜蜂と蜘蛛の違いを、「アリは何も狩り取らず [何か作り出すこともなく]、すでにできあがったものを集めるだけであるが、クモは何も作らず、何も貯えず、餌を狩り捕るだけである。しかるに [中略] ミツバ

チは何も狩り捕らないが、自分で食物を作って貯える」と分析している³⁴⁾。

蜜を集めた働き蜂が夕暮れ巣箱へと帰る姿は、シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』(1602年頃)で、ギリシャ軍の位階制度の模範となっている。メネレーアスの妻ヘレン奪還を期してトロイを包囲して、はや7年。長引く戦争に決着がつかない理由を討議するギリシャ軍。ユリシーズの分析では、我が軍の指揮系統の乱れが原因であるという。その元凶がアキレウスであると、総大将アガ멤ノンに進言する。

When that the general is not like the hive

To whom the foragers shall all repair,

What honey is expected? (*Troilus and Cressida*, I. iii. 81-83)

(総大将は蜂の巣箱に似て、/ 働き蜂がすべてそこに戻って来るのでなければ、
/ 如何なる蜜が期待できよう。)

総大将と兵士との理想の関係が、わずかの詩行で簡明に示される。

ところが、蜜蜂と勤労とがひとつの連結として人類史上はじめて登場するのは、ヘシオドスの教訓叙事詩『仕事と日々』(*Works and Days*)だ。話の大枠は、ヘシオドス自身が父の遺した土地をめぐり、裁判で策を弄する弟ベルセスに正義と労働の大切さを語る、というものである。特に前半では、人間には労働という宿命が課せられ、農作業に精を出すことこそ飢えずに暮らす最善の方策だと訓戒を垂れる。勤労の尊さを詠んだ箇所に蜜蜂が現れる。

神々も人々も、怠けものにはとがめをむける、

針のない怠けばちの性根がよくないと。

仕事を怠け、働きもののみつばちの労苦を喰らっているから、と。

(中略) 人間は怠けものをにくむもの。

農は恥ではない、怠けた暮らしこそ恥なのだ。(久保正彰訳)³⁵⁾

1618年ロンドンで、ホメロスの翻訳者として著名なジョージ・チャップマン (George

Chapman, 1559-1634) により『仕事と日々』が、『ヘシオドスの農耕詩』(*The Georgics of Hesiod*) のタイトルで出版される。当該の箇所は、

Whoeuer idly liues, both Gods, and Men
Pursue with hatefull and still-punishing spleene.
The slothfull man is like the sting-lesse Drone,
That all his power, and disposition,
Emploies to rob the labours of the Bee;
And with his sloth, deuour her Industrie. . . .
Hate with infernall horror, th' idle Drone.
Labour, and thriue; and th' idle 'twill inflame.
No shame to labor; sloth is yok't with shame.³⁶⁾

と詩的に置き換えられる。ここで怠け蜂とは、同じ父の遺した財産を使い果たし、さらに分け前を訴訟で要求する浮浪者同然となった弟ペルセスを指すとの指摘もあるが³⁷⁾、普遍的には、農事に勤しむのが神が嘉する人間の道であり、働き者の蜜蜂を大いに誉めそやす代わりに怠け蜂をこき下ろし、諸悪の元凶が怠け者という構図が示される。

また、ヘシオドスはもうひとつの作品『神統記』(*Theogony*) で、怠け蜂の比喩をさらに展開する。パンドラ神話を語る際、妻が夫の破滅の原因であると説く。それ自体は、諸家により指摘されるように、ヘシオドスの女性蔑視の一端が窺える箇所であるが、女性が怠け蜂と同じであるからと理由づけがなされる。

For from her comes the race of female women, a great woe for mortals,
dwelling with men, no companions of baleful poverty but only of luxury. As
when bees in vaulted beehives nourish the drones, partners in evil works —all
day long until the sun goes down, every day, the bees hasten and set up the
white honey-combs, while drones remain inside among the vaulted beehives

and gather into their own stomachs the toil of others. . . .³⁸⁾

(彼女 [パンドラ] に人間の大きな禍の種、女の種族が由来する。赤貧洗うが如き者とは連れ添わず、裕福な者とだけ連れ添う。それはあたかも、ドーム状の巣箱の中で蜜蜂が悪行を為す連れの怠け蜂を養うのに似ている。毎日、日が暮れるまで終日、蜜蜂は白い蜂巢造りに勤しむのに、怠け蜂はというとドーム状の巣箱に陣取り蜜蜂の揚がりをお腹に放り込む・・・)

先に触れたように、古代ギリシャでは蜜蜂の性別は曖昧であり、ここで現代的な知見を持ち込み「ドローン」(“drones”)を「雄蜂」と訳すと、男女・雌雄の対置が逆転して不適切である。重要なのは、『仕事と日々』と同様、働きの蜜蜂は善、浪費家の怠け蜂は悪という構図であり、昆虫学者の視点から眺めた雄蜂ではなく、詩人の比喩表現としての「怠け蜂」の誕生である。

ところで、ヘシオドスは『仕事と日々』と『神統記』の両方で、パンドラ神話を語る。火を盗んだ神プロメテウスと人類最初の女性パンドラの話。ヘシオドスが説くパンドラ神話で共通する話の筋はこうだ。先を見通す力のある神プロメテウスが主神ゼウスを罠にかけ騙すと、腹を立てたゼウスはその報復に人間の頼みとする火をその視界から遠ざける。ところが、奸智に長けたプロメテウスは大ウイキョウの窟みに火種を隠匿し、ゼウスの目を盗み人間に与える。怒り心頭に発したゼウスは新たな禍を人間に与えようと、オリンバスの神々に命じて人類最初の女性を造らせる。神々より贈り物を与えられたので、彼女はパンドラと呼ばれた。プロメテウスは先々の用心から、弟エピメテウスに神々より贈り物を受け取らぬよう指示を与えてあったが、あとで後悔すると言う名に違わず弟はパンドラを妻に迎え、人類の破滅を招く。

『仕事と日々』では、パンドラが好奇心から神々より授かった壺(あるいは甕や瓶、あるいは箱)の蓋を開けると、人間を懲らしめる目的で神々が悪意を込めて贈った災禍が一斉に飛び出し、それ以前には未知であった不幸、病気、辛い労働が遍満するに至る。ただ、慌てたパンドラが蓋を閉めた壺の中に、「希望」(エルピス)だけが残ったという。はたして、希望が悪意の贈り物の範疇に入るか否か、議論の分かれ

るところである。たしかに、一見したところ、希望は悪意の贈り物に相応しくないように思われる。だが、ヘシオドスはこの教訓的な叙事詩の冒頭、詩の女神ムーサたちに鼓吹を祈願したあと、2種類の「争い」(エリス)について新説を唱える。人を不幸に陥れる妬みや嫉妬に起因する悪い意味での「争い」ばかりではなく、人を繁栄に導く向上心に由来するよい意味での「争い」があると。「争い」には二面性がある、つまり、捉え方によって両刃の剣になるという物事の見方を提唱していると考えられる。「希望」について、ヘシオドスは2種類あるとうたっている訳ではないが、詩人の「争い」について、先述の解釈・分析に基づけば、人の命を繋ぐポジティブな「希望」だけではなく、夢を諦めず人生の局面で新たな一歩を踏み出せなくするネガティブな「希望」も想定されよう。見方によっては、「希望」は必ずしもバラ色だけとは限らず、悪意をもって収めた贈り物のひとつと考えられる。

このパンドラ神話を、偶然の一致か、ハーバートが「滑車」(“The Pulley”) で採用する。

When God at first made man,

Having a glasse of blessings standing by;

Let us (said he) poure on him all we can:

Let the worlds riches, which dispersed lie,

Contract into a span. (ll. 1-5)

(神がはじめて人間を創り給うたとき、

人間のかたわらで恵みのグラスを手に持ち

さあ、[仰せられた] 持てるすべてを注ぎ込み

散在する世の富を

掌の大きさに縮約させよ、と。)

通常は、ひたすら神の言葉に信を置き世俗的なイメージアリーを避けるハーバートであるが、ここではギリシャ神話を下敷きに、しかも巧妙に裏返した形で語り始める。様々な財宝というべきものが人間に与えられたところで、「希望」ならぬ「安息」

(“Rest”)が底に止まっている。スタンザの最終行(底)に「安息」が鎮座するよう工夫が凝らされる。

So strength first made a way;
Then beautie flow'd, then wisdom, honour, pleasure:
When almost all was out, God made a stay,
Perceiving that alone of all his treasure
Rest in the bottome lay. (ll. 6-10)

(それで、まず力が躍り出た、
それから美が進み出た、次ぎに智慧と名誉と快楽が続いた。
ほとんどすべてが出尽くしたとき、神は手を休め、
すべての財宝のうち、安息だけが
グラスの底に残っているのに気付かれた。)

ところが、ハーバートの神はここまで来て逡巡する。はたして「安息」を人間に与えたものかと。なぜかという、人間は神の贈り物「安息」に満足して、その贈り主たる神に感謝しなくなるのではないかと、との懸念が払拭できないからである。『仕事と日々』でヘシオドスが示唆する「希望」と同様に、「安息」が捉え方によっては両刃の剣となる可能性がある。パンドラ神話は、イギリス・ルネッサンス時代に人口に膾炙した話のひとつであり、ハーバートが「滑車」を構想する際ヘシオドスから直接に着想を得たとは思えないが、ヘシオドス的な物事の二面性の捉え方が共通していること、また聖書の世界から離れてあえてギリシャの古典をベースにしたこと、さらに勤勉な蜜蜂のイメージを他の詩で援用していることを考慮すると、両者に共通性がないと断言できようか。

むすび

17世紀イギリスでは、プロテスタントの職業倫理から仕事の重要性が叫ばれ、牧

師の説教や文学者の詩にまで、その考え方が忍び寄っている。牧師兼詩人のジョージ・ハーバートも時代精神の影響を免れず、詩の中に蜜蜂のイメージを挿入する。人類史上はじめて蜜蜂のイメージを用いながら勤労の大切さを訴えたのは、ヘシオドスであった。それ以来、働き蜂と怠け蜂を対比させ、勤労を勧めるとともに怠惰を諷めることは普遍的なテーゼとなり、また雄の「怠け蜂」の象徴が昆虫学の知見も相俟って古典の素養のあるプロテスタントにも受け入れられたものと推察される。ベンブルック伯爵のプロテスタント派閥に属していたハーバートが、カルヴィニズムの考え方に多少とも影響され、労働や仕事の大切さを説くのに蜜蜂のイメージを用いたのは、ヘシオドスに深く感化されたという訳ではないが、古典の伝統を無意識のうちに受け入れた証左ではないだろうか。

註

- 1) ジョージ・ハーバートの引用は、*The Works of George Herbert*, ed. F.E. Hutchinson (1941; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1945) による。以下本文中の引用について、詩の場合は、題名と行数を示し、散文の場合は、*Works* と略記し頁数を示す。詩の邦訳は、鬼塚敬一訳「ジョージ・ハーバート詩集」(南雲堂、1986年)を参照した。なお、散文の邦訳は試訳。
- 2) Cf. Morris Palmer Tilley, ed., *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1950; rpt. New York: AMS Press, 1984), p. 37.
- 3) アリストテレス『動物誌(下)』島崎三郎訳、全2冊(岩波文庫、1998-1999年) 166頁、181頁。
- 4) Pliny, *Natural History*, trans. H. Rackham, vol. 3 of *Books 8-II*, 2nd edn. (1940; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1983/1997), p. 441 and p. 449.
- 5) アリストテレス『動物誌(上)』前掲、25頁。
- 6) スウィフト『桶物語り・書物戦争』深町弘三訳(岩波文庫、1968年/1988年) 160-193頁。
- 7) アリストテレス『動物誌(下)』前掲、169-182頁。アリストテレス『動物発生論』島崎三郎訳、アリストテレス全集第9巻所収(岩波書店、1969年) 228-234頁。ウェルギリウスの『農耕詩』第4歌では、ブーゴニアと呼ばれる蜜蜂再生の秘法が紹介されている。「殺された若い雄牛の腐敗した血が、これまでしばしば、蜜蜂を生み出したか・・・」(ウェルギリウス『牧歌／農耕詩』小川正廣訳、[京都大学出版会、2004年] 187頁) また、旧約の「士師記」では、サムソンが「あのライオンの屍を見ようと脇道にそれたところ、ライオンの死骸には蜜蜂の群がいて、蜜があった。」(『聖書 新共同訳』[日本聖書協会、1987年][旧] 469頁) 以下、聖書の邦訳の引用はこの版による。
- 8) シェイクスピアの引用は、*Shakespeare: Complete Works*, ed. W.J. Craig (1905; London:

Oxford University Press, 1954/1974) により、以下本文中に、幕、場、行数を示す。

- 9) Thomas Moffet, *The Silkwormes and their Flies*, ed. Victor Houlston (1599; rpt. Binghamton, N. Y.: Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1989).
- 10) Thomas Muffet, *The Theater of Insects*, in *The History of Four-Footed Beasts and Serpents and Insects*, vol. 3 (1658; rpt. New York: Da Capo Press, 1967), pp. 891-892.
- 11) ジョン・ミルトン「イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論」新井明・野呂有子訳（聖学院大学出版会、2003年）42頁、146頁。
- 12) ウェルギリウス、前掲書、188-189頁。
- 13) バーナード・マンデヴィル「蜂の寓話——私悪すなわち公益」泉谷治訳（法政大学出版局、1985年）11頁。なお、原文は、“They were not Slaves to Tyranny, / Nor rul’d by wild Democracy; / But Kings, that could not wrong, because / Their Power was circumscrib’d by Law.” (Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees*, ed. F.B. Kaye, vol. I [1924; rpt. Indianapolis, IN: Liberty Press, 1988], p.17)
- 14) Keith Thomas, *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800* (1983; rpt. New York: Oxford University Press, 1996), p. 62. (『人間と自然界』山内昶監訳 [法政大学出版局、1989年] 83頁註) なお、河津千代訳『牧歌・農耕詩』新装版（未来社、1994年）には、「この説は彼の死後、1752年に発表された」（327頁、訳註〔5〕）とある。
- 15) Aelian, *On the Characteristics of Animals*, trans. A. F. Scholfield, vol. 1 of *Books I-4* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1958), pp. 23-25. 働き蜂による雄蜂の殺戮については、カール・フォン・フリッシュ『ミツバチの生活から』桑原寿太郎訳（1975年：ちくま学芸文庫、1997年）78-79頁を参照。
- 16) アリストテレス「動物誌（下）」前掲、182頁。
- 17) Thomas Muffet, *The Theater of Insects*, op. cit., p. 919.
- 18) トーニー「宗教と資本主義の興隆（上）」出口勇蔵・越智武臣訳、全2冊（岩波文庫、1965年/1993年）156頁参照。
- 19) トーニー、前掲書、188頁参照。
- 20) Plato, *The Republic*, trans. Paul Shorey, vol. 2 of *Books VI-X* (London: Heinemann, 1935/1963), pp. 267-269. 藤沢令夫訳『国家（下）』全2冊（岩波文庫、1979年/1980年）では、「雄蜂」と訳されている（191頁）。
- 21) “And the LORD God took the man, and put him into the garden of Eden to dress it and to keep it.” (*The Holy Bible*, King James Version [New York: American Bible Society, 1986], p. 2); 「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。」(『聖書 新共同訳』前掲、[旧]3頁)
- 22) 山根正弘「アン・クリフォードとジョージ・ハーバート——ベンブルック伯派閥の中で——」創価大学英文学会編『英語英文学研究』第66号（2010年3月）61-81頁参照。
- 23) *A Christian Directory*, vol. I of *The Practical Works of Richard Baxter* (1846; rpt. Morgan, PA: Soli Deo Gloria, 2000), p. 115. マックス・ヴェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳、改訳版（岩波文庫、1989年/2000年）298-299頁参照。Cf. Cristina Malcolmson, *Heart-Work: George Herbert and the Protestant Ethic* (Stanford: Stanford University Press, 1999), pp. 37-38.

- 24) ジョン・ミルトン『失楽園(上)』平井正穂訳、全2冊(岩波文庫、1981年/1983年)195頁。以下、『失楽園』の邦訳は平井訳を拝借し、本文中に、巻、頁数を示す。
- 25) John Milton, *Paradise Lost*, ed. Stephen Orgel and Jonathan Goldberg (Oxford: Oxford University Press, 2004/2008), p. 182.
- 26) ハーバートの先駆詩人ジョン・ダンが「聖職者になったティルマン氏に」(“To Mr. Tilman after he had taken orders,” 1618)で、酷似する語句を使用している。「その彼らは、あたかも終日、衣装に凝り、恋人と戯れ、／お世辞を言うのに費やすというのに」(26-30行)。その影響関係については、山根正弘「ジョージ・ハーバートの聖職者になることへの逡巡——ジョン・ダンの『聖職者になったティルマン氏に』と関連して——」(前編)創価大学英文学会編『英語英文学研究』第58号(2006年3月)73-90頁。および同(後編)『英語英文学研究』第59号(2006年9月)53-63頁。を参照。
- 27) ハーバートの親友ニコラス・フェラーとアーサー・ウッドノスの親戚筋にエドワード・コレットがいる。両親がリトル・ギディングに移り住んだとき、ロンドンで徒弟として働くが不良少年で一族の悩みの種だった。サザークにある場末の居酒屋に通い詰め、借金まみれになり挙げ句の果て解雇された。ウッドノスは彼を日雇いの下男でさえ務まるかどうか危ぶみ、最後の手段としてヴァージニアカバーミュダ諸島に遣るしかないと考える。Cf. A.L. Maycock, *Nicholas Ferrar of Little Gidding* (1938; rpt. Grand Rapids, Mich.: William B. Eerdmans, 1980), pp. 247-248.
- 29) *Ibid.*, pp. 162-163; pp. 245-246.
- 29) B. Blackstone, ed., *The Ferrar Papers* (Cambridge: Cambridge University Press, 1938), p. 270.
- 30) ホメーロス『イーリアス(上)』呉茂一訳、全3冊(岩波文庫、1953-1958年/1982-1983年)51頁。
- 31) ホラーティウス『歌章』藤井昇訳(現代思潮社、1973年)184頁。
- 32) Gilbert Highet, *The Classical Tradition: Greek and Roman Influences on Western Literature* (1949; rpt. New York: Oxford University Press, 1985), p. 226. (ギルバート・ハイエット『西洋文学における古典の伝統[上]』柳沼重剛訳、全2冊[筑摩叢書、1969年/1985年]237頁)
- 33) モンテーニュ『エッセー(一)』原二郎訳、全6冊(岩波文庫、1965-1967年/1986年)288頁。1603年のジョン・フローリオによる英訳：“The Bees doe here and there sucke this, and cull that flower, but afterward they produce the hony, which is peculinary their owne, then is it no more Thyme or Majoram.” (*Montaigne's Essays*, trans. John Florio, 3 vols. [1603; rpt. London: Dent, 1980], I, p. 157)
- 34) アリストテレス『動物誌(下)』前掲、169-170頁。
- 35) 久保正彰(編訳)『ギリシャ思想の素地 ヘシオドスと叙事詩』(岩波新書、1973年)205-206頁。松平千秋訳『仕事と日』(岩波文庫、1986年/2000年)では、「怠惰な生を送る者に対しては、神も人ともに憤る、／怠け者はその性情が、雄蜂の労苦の結晶を、／みずからは働きもせず食いつぶす針のない雄の蜜蜂に似ておる」(47頁)と、「雄蜂」と訳されている。
- 36) George Chapman, trans., *The Georgics of Hesiod* (1618; rpt. New York: Da Capo, 1971), p. 15.
- 37) Maria S. Marsilio, *Farming and Poetry in Hesiod's Works and Days* (Lanham, Maryland: University Press of America, 2000), p. 12.
- 38) Hesiod, *Theogony, Works and Days, Testimoia*, trans. Glenn W. Most (2006; corr. rpt. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2010), p. 51. 廣川洋一訳『神統記』(岩波文庫、1984/2010年)では、「男たちといっしょに暮らすにも／忌まわしい貧乏には連合つらみいとなら

ず 裕福とだけ連れ合うのだ。／ちょうど 釣りがぶさった蜂窩^{はちす}で 蜜蜂たちが／連れ立って
悪業^{はか}を謀る雄蜂どもを養うように／すなわち 蜜蜂たちは 終日^{ひねり} 陽が沈むまで／昼の間は
精出して働き 白い蜂窩を作るのに／雄蜂どもは その釣りがぶさった蜂窩の奥に坐りこんで
／他人の稼ぎを 自分たちの胃袋のなかに収穫^とこむ・・・」(76-77頁)と、「雄蜂」と訳されてい
る。